コード No.

提出日：2019 年 12 月 10 日

令和元年度「第 10 回東アジア市民社会フォーラム開催」報告書

公益財団法人公益法人協会　白石喜春

１．プログラムの目的

＜東アジア市民社会フォーラムの開催目的＞

東アジア市民社会フォーラムは、以下の目的を達成するために実行委員会での準備を経て実現されるものである。

１）市民社会における日中韓の相互理解と融和通して、東アジア地域の平和と繁栄の実現を目指す。

２）東アジア地域の市民社会セクターが抱える様々な問題や課題を共有し、解決への道筋を探る。

３）安定した市民社会の実現に向け、日中韓の相互協力で市民社会セクターの制度環境の改善を図る。

＜第 10 回フォーラムの目標＞

東アジア市民社会フォーラムは、日・中・韓３か国の相互理解と融和をとおして、東アジア地域の平和と繁栄の実現を目指す国際交流フォーラムである。2009 年以降、日中韓の市民社会の発展を目指すべく、毎年各国が持ち回りで開催している。第 10 回フォーラムは、第 4 巡目として東京で開催されるが、市民社会が主体的に実現する持続可能な福祉を主題とし、高齢化社会への挑戦に向けた各国での市民社会組織による取り組みや経験を共有し、学び合いの機会を創出する。

今回の特色であるクローズドミーティングでは、フォーラムで議論された内容を踏まえ、高齢化社会がさらに加速する将来において、市民社会組織はどのような役割を果すべきなのか、方法論も交えて 3 か国の識者を中心に議論を展開し、将来のさらなる高齢化社会に備えたいと考えている。

２．主な活動内容・スケジュール

（1）関係団体

主催団体：公益財団法人公益法人協会

共催団体：ボランティア活動国際研究会（JIVRI）
中国国際民間組織協力促進会(CANGO)
韓国ボランティアフォーラム(KFV)

協　　力：特定非営利活動法人市民社会創造ファンド
認定特定非営利活動法人日本 NPO センター
公益財団法人助成財団センター
公益財団法人トヨタ財団

助成協力：公益財団法人庭野平和財団

実施主体：第 10 回東アジア市民社会フォーラム実行委員会（名簿は（２）をご参照）

後　　援：独立行政法人国際協力機構(JICA)

（2）実行委員会委員名簿

50 音順・敬称略

	参加者	所 属	実動部隊
1	雨宮　孝子	(公財)公益法人協会理事長	
2	太田　達男	(公財)公益法人協会会長	
3	楠田　健太	東京藝術大学准教授、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事	○
4	白石　喜春	(公財)公益法人協会研究員、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事長	○
5	清水 みゆき	(認定特活)日本 NPO センター国際部門	○
6	鈴木　勝治	(公財)公益法人協会副理事長	
7	高谷　忠嗣	(公財)庭野平和財団専務理事	
8	高宮　洋一	城西国際大学環境社会学部教授	
9	藤井　　衞	ぐりーんろーど理事	○
10	村上　徹也	国立青少年教育振興機構センター長、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事	○
11	山岡　義典 ※委員長	(特活)市民社会創造ファンド理事長、(公財)助成財団センター理事長、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事	
12	山田　絵美	(特活)市民社会創造ファンド	○
13	湯瀬　秀行	(公財)助成財団センター事務局次長	○
14	顧　子　煖	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事	○

（3）実施スケジュール

日 程	内 容
11 月 26 日	第1回実行委員会（第 10 回フォーラム実施体制、テーマ、開催日程等）
12 月 10 日	第 1 回 WG
12 月 20 日	第 2 回実行委員会（第 10 回フォーラム開催形式、開催場所、予算等）
1 月 18 日	第 3 回実行委員会（第 9 回フォーラム報告会準備状況、第 10 回フォーラム準備状況）
2 月 13 日	第 4 回実行委員会（第 9 回フォーラム報告会準備状況、第 10 回フォーラム準備状況）
3 月 11 日	第 5 回実行委員会(第 9 回フォーラム報告会最終確認等)
3 月 29 日	第 9 回東アジア市民社会フォーラム報告会開催（第 10 回フォーラムのプロモーション実施）
4 月 5 日	第 6 回 WG 会議
5 月 1 日	公益法人誌 5 月号に第 9 回フォーラム報告会の報告記事掲載
5 月 10 日	第 6 回実行委員会（視察先、登壇者の検討、第 10 回フォーラム準備状況等）
6 月 11 日	第 7 回 WG 会議
6 月 20 日	第 7 回実行委員会(第 10 回フォーラム準備状況、視察先、スケジュール等)
8 月 5 日	第 8 回実行委員会(第 10 回フォーラム準備状況、スケジュール、予算等)
8 月 13 日	第 8 回WG会議
9 月 3 日	第 9 回実行委員会（第 10 回フォーラム準備状況、実行委員役割、広報等）
10 月 17 日	第 10 回実行委員会(最終確認)
10 月 26 日 ～30 日	第 10 回東アジア市民社会フォーラム「長寿社会と市民社会組織」
12 月 1 日	公益法人誌 12 月号に第 10 回フォーラム報告記事掲載
12 月 9 日	第 11 回実行委員会（第 10 回フォーラム実施報告、第 11 回フォーラムに向けて等）
1 月 24 日	第 10 回東アジア市民社会フォーラム報告書　完成予定
2 月 3 日	報告書をホームページにて公開予定

（4）スケジュール

中国側参加者

日 程		内 容
10 月 26 日(土)		羽田空港国際線ターミナル到着(出迎え：白石)
		羽田空港国際線ターミナル→羽田空港第 2 ターミナル(無料連絡バス) 羽田空港第 2 ターミナル→東横 INN 羽田空港 1（東横 INN 送迎バス)
10 月 27 日(日)		東横 INN 羽田空港 1(09:00 出発)→多摩草むらの会(JCK中型バス) ※08:30～09:00 学生ボランティア 2 名に対するオリエンテーション(対応者：高宮、白石)
10:00		(特活) 多摩草むらの会 09：55　程久保 6 丁目交差点（多摩草むらの会スタッフなど乗車) 10：00　夢畑で出迎え（山岡合流、夢畑内見学) 10：40　夢畑出発 11：00　ココリア多摩センター到着 畑 de きっちん、夢うさぎ、DF 夢畑見学 12：00　出発 12：20　グリーンビレッジ到着 昼食（中国側 12 名＋事務局等 5 名＝17 名) 13：00　グリーンビレッジ施設見学 13：20　風間代表による全体説明 質疑応答 14：30　解散 ※通　訳：車花子（法人 GH スタッフ)、呉庭（海第二工業大学日本語課講師) ※同行者：藤田修作（事務局長)、國本秀夫（本部事務局) （同行者：山岡、高宮、藤井、学生１名)
15:30		多摩草むらの会→JICA 地球ひろば(JCK中型バス)
16：45 17:00		開 場(受付：長沼、湯瀬、山田、白石) 歓迎夕食会 挨拶　太田達男(公益法人協会　会長) 韓国　南 英 燦(韓国ボランティアフォーラム　会長) 中国　赵 大 兴(中国国際民間組織協力促進会　副理事長) 閉会　山岡義典(日本側実行委員会　委員長)
19:00		JICA 地球ひろば→JICA 東京国際センター(JCK中型バス)
10 月 28 日(月)		JICA 東京国際センター（07：30 山岡)→JICA 地球ひろば(JCKマイクロバス)
		第 10 回東アジア市民社会フォーラム「長寿社会と市民社会組織」 総合司会：LI Yanyan(駒澤大学文学部教授)
09:00		開 場
開会 挨拶	09:30 09:35 09:40 09:45	雨宮孝子(公益法人協会　理事長) 藤谷浩至(国際協力機構　東・中央アジア部　部長) 赵大兴（中国国際民間組織協力促進会　副理事長) 南英燦(韓国ボランティアフォーラム会長)
基調 講演	09:50 10:20 10:50	韓国　李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校　人文大學長) 中国　章兴鸣（江南大学新社会组织研究中心　执行主任) 日本　高橋紘士（東京通信大学教授、高齢者住宅財団顧問)
11:20		小休憩
11:30		基調講演者による質問への応答

11:50		写真撮影
12:00		昼 食(弁当)
特別報告	13:00 13:20	日中韓交流の最近の動きから ・王　　青(日中福祉プランニング コーディネーター) ・金 成垣(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
事例報告	13:50 14:10	中国　刘　飞（成都市爱有戏社区发展中心 主任） 中国　赵　刚（东北师范大学家庭教育研究院 院长）
	14:30	小休憩
	14:40 15:00	韓国 鄭鍾和(三育大學校 保健福祉大學長) 韓国 申聖國(社會的企業 Hug-In 代表)
	15:20 15:40	日本 清水肇子(さわやか福祉財団 理事長) 日本 奥田知志(抱樸(ほうぼく) 理事長)
16:00		休 憩
16:20		パネルディスカッション(特別報告者2名＋事例報告者6名)　　モデレータ:藤井 衛
17:40		閉会挨拶　　山岡義典(実行委員会委員長)（終了 17:45）
17:45 18:00		交歓会(J's Café) 開 場(受付:湯瀬、白石) 開会挨拶　　高谷忠嗣(庭野平和財団 専務理事) 挨拶と感想　中国 Zhao Daxing(中国国際民間組織協力促進会 副理事長) 韓国 李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長)
20:00		JICA 地球ひろば→JICA 東京国際センター(JCKマイクロバス)
10 月 29 日(火)		JICA 東京国際センター(07:30) →JICA 地球ひろば(JCKマイクロバス)
		クローズドミーティング「長寿社会と市民社会組織～市民社会が主体的に実現する持続可能な福祉」(同時通訳)
09:00		主旨説明　　村上徹(JIVRI 理事)
報告	09:05	藤井 衛(ぐりーんろーど理事)
パネルセッション	09:20	＜韓 国＞ ・李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長) ・鄭鍾和(三育大學校 保健福祉大學長) ・申聖國(社會的企業 Hug-In 代表)
	09:35	＜中 国＞ ・章兴鸣(江南大学新社会组织研究中心　执行主任) ・刘　飞(成都市爱有戏社区发展中心 主任) ・赵　刚(东北师范大学家庭教育研究院 院长)
	09:50	＜日 本＞ ・稲葉一洋(立正大学社会福祉学部 教授) ・山岡義典(実行委員会委員長) ・村上 徹(JIVRI 理事)
10:05		小休憩
10:15		ディスカッション(パネルセッション報告者6名)
抱負と期待	11:40 11:45	第 11 回東アジア市民社会フォーラム開催に向けて ・南英燦(韓国ボランティアフォーラム 会長)(ファシリテータ) ・李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長) ・李仁雨(社会的経済地域化研究所 代表) ・赵刚(东北师范大学家庭教育研究院 院长)

	11:50 11:55	・赵大兴(中国国際民間組織協力促進会 副理事長) ・刘银托(中国国際民間組織協力促進会 調査副部長) ・山岡義典(実行委員会委員長) ・鈴木勝治(公益法人協会 副理事長) ・村上 徹(JIVRI 理事) 意見交換(検討事項:テーマ、開催地、開催時期ほか)
12:25		閉会挨拶 高谷忠嗣(庭野平和財団 専務理事)
12:30		JICA 地球ひろば→東京清風園(JCKマイクロバス)
13:30 14:00 15:00		弁当(東京清風園食堂) 東京清風園 視察(通訳:アジアの新しい風スタッフ、同行者:藤井、鈴木、白石) 東京清風園→たちばなホーム たちばなホーム視察(通訳:アジアの新しい風スタッフ、同行者:藤井、鈴木、白石) たちばなホーム→東京清風園
16:00		公益法人協会(通訳:アジアの新しい風スタッフ、同行者:藤井、鈴木、白石)
16:45		東京清風園→JICA 東京国際センター(JCKマイクロバス)
10 月 30 日(水)		JICA 東京国際センター→羽田空港国際線ターミナル(JCK中型バス)(白石見送り)

韓国側参加者

日 程		内 容
10 月 27 日(日)		成田国際空港 12 時 20 分着 KE703 (ターミナル 1 出口付近 12:30 集合、白石出迎え)
13:00		成田国際空港→巣鴨商店街(貸切バス)
15:00		現地視察 巣鴨地蔵通り商店街振興組合 副理事長 松宮様、広報・渉外 木崎様 (通訳:方真雅、同行者:白石)
16:00		巣鴨商店街→JICA 地球ひろば(貸切バス)
16:45 17:00		開 場(受付:長沼、湯瀬、山田、白石) 歓迎夕食会 挨拶 太田達男(公益法人協会 会長) 韓国 南 英 燦(韓国ボランティアフォーラム 会長) 中国 赵 大 兴(中国国際民間組織協力促進会 副理事長) 閉会 山岡義典(日本側実行委員会 委員長)
19:00		JICA 地球ひろば→宿泊先(貸切バス)
10 月 28 日(月)		宿泊先→JICA 地球ひろば (貸切バス)
		第 10 回東アジア市民社会フォーラム「長寿社会と市民社会組織」 総合司会:LI Yanyan(駒澤大学文学部教授)
09:00		開場
開会 挨拶	09:30 09:35 09:40 09:45	雨宮孝子(公益法人協会 理事長) 藤谷浩至(国際協力機構 東・中央アジア部 部長) 赵大兴(中国国際民間組織協力促進会 副理事長) 南英燦(韓国ボランティアフォーラム会長)
基調 講演	09:50 10:20 10:50	韓国 李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長) 中国 章兴鸣 (江南大学新社会组织研究中心 执行主任) 日本 高橋紘士(東京通信大学教授、高齢者住宅財団顧問)
11:20		小休憩(質問用紙の回収)
11:30		基調講演者による質問への応答
11:50		写真撮影

12:00		昼食(弁当)
特別報告	13:00 13:20	日中韓交流の最近の動きから ・王　　青(日中福祉プランニング コーディネーター) ・金 成垣(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
事例報告	13:50 14:10	中国　刘　飞（成都市爱有戏社区发展中心 主任） 中国　赵　刚（东北师范大学家庭教育研究院 院长）
	14:30	小休憩
	14:40 15:00	韓国 鄭鍾和(三育大學校 保健福祉大學長) 韓国 申聖國(社會的企業 Hug-In 代表)
	15:20 15:40	日本 清水肇子(さわやか福祉財団 理事長) 日本 奥田知志(抱樸(ほうぼく) 理事長)
16:00		休 憩(特別報告、事例報告の質問用紙の整理)
16:20		パネルディスカッション(特別報告者2名＋事例報告者6名)　　モデレータ:藤井 衛
17:40		閉会挨拶　　山岡義典(実行委員会委員長)（終了 17:45)
17:45 18:00		交歓会(J's Café) 開場(受付:湯瀬、白石) 開会挨拶　　高谷忠嗣(庭野平和財団 専務理事) 挨拶と感想　中国 Zhao Daxing(中国国際民間組織協力促進会 副理事長) 韓国 李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長)
20:00		JICA 地球ひろば→宿泊先（貸切バス）
10 月 29 日(火)		宿泊先→JICA 地球ひろば(貸切バス)
09:00		クローズドミーティング「長寿社会と市民社会組織～市民社会が主体的に実現する持続可能な福祉」(同時通訳)
09:00		主旨説明　村上徹(JIVRI 理事)
報告	09:05	藤井 衛(ぐりーんろーど理事)
パネルセッション	09:20	＜韓 国＞ ・李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長) ・鄭鍾和(三育大學校 保健福祉大學長) ・申聖國(社會的企業 Hug-In 代表)
	09:35	＜中 国＞ ・章兴鸣(江南大学新社会组织研究中心　执行主任) ・刘　飞(成都市爱有戏社区发展中心 主任) ・赵　刚(东北师范大学家庭教育研究院 院长)
	09:50	＜日 本＞ ・稲葉一洋(立正大学社会福祉学部 教授) ・山岡義典(実行委員会委員長) ・村上 徹(JIVRI 理事)
10:05		小休憩
10:15		ディスカッション(パネルセッション報告者6名)
抱負と期待	11:40 11:45	第 11 回東アジア市民社会フォーラム開催に向けて ・南英燦(韓国ボランティアフォーラム 会長)(ファシリテータ) ・李金龍(韓国ボランティア学会会長、詳明大學校 人文大學長) ・李仁雨(社会的経済地域化研究所 代表) ・赵刚(东北师范大学家庭教育研究院 院长) ・赵大兴(中国国際民間組織協力促進会 副理事長)

	11:50 11:55	・刘银托(中国国際民間組織協力促進会 調査副部長) ・山岡義典(実行委員会委員長) ・鈴木勝治(公益法人協会 副理事長) ・村上 徹(JIVRI 理事) 意見交換(検討事項:テーマ、開催地、開催時期ほか)
12:25		閉会挨拶 高谷忠嗣(庭野平和財団 専務理事)
12:30		昼食(JICA 地球ひろば)
14:00		注文をまちがえる料理店 視察(通訳:方真雅)
15:30		休憩
15:40		パブリックリソース財団 視察(通訳:方真雅)
17:00		JICA 地球ひろば→宿泊先 (貸切バス)

（5）参加者名簿

＜日本側参加者：４７名＞

	名前	所属／肩書
1	杉本遥香	産業能率大学経営学部
2	荒谷茅耶	大妻女子大学家政学部
3	奥江英樹	株式会社レノバ
4	袖井孝子	お茶の水女子大学
5	中島 智人	産業能率大学経営学部
6	紙野憲三	公益財団法人 東レ科学振興会
7	相良泰行	（一社）食感性コミュニケーションズ
8	伊藤忠司	（一社）食感性コミュニケーションズ
9	藤本龍夫	公益社団法人　東京のあすを創る協会
10	久保斤欠	高齢化社会をよくする女性の会 会員
11	出塚清治	出塚会計事務所
12	関塚　元太	調布ゆうあい福祉公社
13	張梦瑶	法政大学大学院
14	高橋英與	一般社団コミュニティネットワーク協会
15	大豆生田清志	（公財）浦上食品・食文化振興財団
16	中村正孝	特定非営利活動法人　ポジティブプラネットジャパン
17	伊井野　雄二	特定非営利活動法人　赤目の里山を育てる会
18	上田英司	日本ＮＰＯセンター
19	花崎和彦	助成財団センター
20	伊藤晶子	一般社団コミュニティネットワーク協会
2	Li Yanyan	駒澤大学教授
22	雨宮　孝子	(公財)公益法人協会理事長
23	太田　達男	(公財)公益法人協会会長
24	楠田　健太	東京藝術大学准教授、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事
25	白石　喜春	(公財)公益法人協会研究員、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事長
26	清水 みゆき	(認定特活)日本NPO センター国際部門
27	鈴木　勝治	(公財)公益法人協会副理事長
28	高谷　忠嗣	(公財)庭野平和財団専務理事
29	高宮　洋一	城西国際大学環境社会学部教授
30	藤井　　衞	ぐりーんろーど理事
31	村上 徹也	国立青少年教育振興機構センター長、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会理事
32	山岡 義典	(特活)市民社会創造ファンド理事長、(公財)助成財団センター理事長
33	山田　絵美	(特活)市民社会創造ファンド
34	湯瀬 秀行	(公財)助成財団センター事務局次長
35	顾子煖	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動国際研究会(JIVRI)理事
36	高橋紘士	東京通信大学教授
37	王　　青	日中福祉プランニング コーディネーター
38	金 成垣	東京大学准教授
39	清水肇子	さわやか福祉財団理事長
40	奥田知志	抱樸(ほうぼく)理事長
41	武藤 良太	(公財)トヨタ財団
42	藤谷浩至	(独法)国際協力機構 東・中央アジア部 部長
43	長瀬慎治	日本NPO センター
44	方真雅	日本社会事業大学博士課程
45	長沼良行	(公財)公益法人協会事務局次長
46	吉澤義勝	(公財)公益法人協会 IT 担当
47	徐　陸一	株式会社　訳坊

＜中国側参加者：１２名＞

	名前	所属／肩書
1	赵大兴 Zhao Daxing	中国国际民间组织合作促进会 秘书长
2	章兴鸣	江南大学新社会组织研究中心 副主任
3	刘飞 Liu Fei	成都市爱有戏社区发展中心 主任
4	方江琴 Fang Jiangqin	成都感同社会工作服务中心 副主任
5	杜灿灿 Du Cancan	成都市爱有戏社区发展中心 副主任
6	邓梅 Deng Mei	成都市爱有戏社区发展中心 副主任
7	周凌旭 Zhou Lingxu	成都市新济源社会工作服务中心 理事长
8	谢焕友 Xie Huanyou	河南省商城县农村发展促进会 会长
9	赵刚 Zhao Gang	东北师范大学家庭教育研究院 院长
10	李学义 Li Xueyi	东北师范大学家庭教育研究院 研究员
11	王大龙 Wang Dalong	东北师范大学家庭教育研究院 研究员
12	刘银托 LIU Yintuo	中国国际民间组织合作促进会 副主任

＜韓国側参加者：２４名＞

	名前	所属／肩書
1	남영찬 Nam, Youngchan	法務法人クラス 代表
2	이해숙 Lee, Haesook	ソウル꽃동네사랑의집 院長
3	오윤덕 Oh, yoondeok	法曹公益法人사랑샘財団 理事長
4	진희선 Jin, heeseon	慶熙大学校公共大学院 教授
5	이인우 Lee, Inwoo	社会的経済地域化研究所 代表
6	문유미 Moon, Yoomi	京畿大学校建設安全大学院 招聘教授
7	이금룡 Lee, Keumryong	詳明大学校人文大 学長
8	정종화 Jeong, Jongwha	三育大学校社会福祉学科 教授
9	신성국 Shin, Seongkook	社会的企業 Hug In 代表
10	신정애 Shin, Jeongae	韓国ボランティアフォーラム 事務総長
11	서보영 Seo, Boyoung	韓国ボランティアフォーラム 幹事
12	김미례 Kim, Mirye	내린천老人福祉センター長
13	송슬기 Song, Seulgi	高陽市ボランティアセンター 主任
14	김숙영 Kim, Sookyoung	楊州市ボランティアセンター 社員
15	김인숙 Kim, Insook	議政府市ボランティアセンター長
16	이창원 Lee, Changwon	議政府市ボランティアセンター 教育コーディネーター
17	권혜옥 Kwon, Hyeok	法曹公益法人사랑샘財団 職員
18	홍점순 Hong, Jeomsoon	光州南区ボランティアセンター長
19	이은영 Lee, Eunyoung	光州南区ボランティアセンター チーム長
20	김정희 Kim, Jeonghee	光州南区ボランティアセンター 事務局長
21	김경모 Kim, Kyungmo	光州南区ボランティアセンター チーム員
22	주은수 Joo, Eunsoo	蔚山大学校社会貢献センター長
23	우승엽 Woo, Seungyeop	蔚山내와동산療養 園長
24	이경미 Lee, Kyungmi	水原市ボランティアセンター 主任

３．助成を受けた活動の報告

2019 年 10 月 28・29 日に国際協力機構(JICA)地球ひろば・国際会議場（東京・市ヶ谷）で、「第 10 回東アジア市民社会フォーラム - 長寿社会と市民社会」を開催した。そして、日本・中国・韓国の市民社会の研究者、市民社会組織の関係者など 83 名が集まり、長寿社会における市民社会の役割について情報共有と学び合いを行った。以下、28 日の公開フォーラムの概要を報告する。

（1）各国からの基調講演の概要

◇高齢社会の挑戦と対応戦略（韓国）

韓国からの基調講演を行った韓国ボランティア学会の李龍会長（詳明大学校人文大学長）は、韓国社会の高齢化の現況について、2017 年に 14%だった 65 才以上の人口比率が、2025 年には 20%を超える見通しで、高齢化スピードが世界で最も早い“圧縮的”高齢化であると解説した。韓国の高齢者の相対的な貧困率は 48.6%（日本は 20%程度）と高く高齢世代内の格差が両極化していて、さらに年金や医療費の面では世代間格差が広がっているという。

このような現況において市民社会組織には、公共サービスの短所（独占化、非効率性、政治の影響）を乗り越え、市場原理の導入によるサービスの質の低下を牽制するとともに、脱物質的な欲求の高まりなど、人々の価値観やライフスタイルの変化にきめ細かく対応するサービスの利用者中心のサービスを提供する役割があると、李会長は主張した。

そして、もともと住んでいた地域で安心して充実した暮らしを続けられるようにするコミュニティケアの推進、民主的で透明性の高い運営、多様な財源確保の努力、市民団体同士のネットワークの強化、住民参加の促進、世代間交流の活性化、民間レベルの国際交流の必要性などが、今後の市民社会の課題として強調された。

李会長の基調講演に対しては、「問題解決の成果にポイントを置き過ぎると、市民社会は制度やお金の仕組みに取り込まれてしまう。市民が自ら仕組みを発明することにこそフォーカスしていくべきではないか。市民社会だからこその価値とは何か、政府や市場と市民社会の望ましい関係とはどうあるべきかを考え続けて、市民社会の独自性を追求する必要がある」という意見が出された。

◇南京地域コミュニティ在宅介護タイムバンクプロジェクト（中国）

中国からの基調講演を行った江南大学新社会組織研究センターの章興鳴副主任は、中国南京市のタイムバンクプロジェクトについて解説した。タイムバンクとは、自らのサービス時間を貯蓄し、必要時に介護を受ける時間に充てる仕組みで、南京市には現在、約 30 のタイムバンクがあり、基本は行政主導で民間組織が運営を委託されている。約 1500 名のユーザーがいる。隣人同士の関係が改善されるという効果もある。

章副主任によると、中国では現在、65 歳以上の人口割合は 11%だが、2050 年には 26%になると予測されている。中国は長期にわたった一人っ子政策が人口構造に負の影響を与えている。そして、中国では子が親の面倒を見る義務が法令化されており、高齢者の介護は依然として家庭が主体であり、介護施設や制度の整備は途上であるという。しかし、若年層はこの分野に参加したがらないので、前期高齢者が後期高齢者を助ける必要が生じている。

タイムバンクプロジェクトには、ボランティアの専門性の低さ、サービスの種類の少なさ、サービスエリアの狭さといった課題があり、現在はサービスの開始と終了時に QR コードで打刻する仕組みだが、更にスマート化、アプリによる一元化などをめざしているという。

タイムバンクプロジェクトについての質疑では、「参加者のボランティア性が薄くなる懸念はないか」という質問があった。これにたいしては、「結果的に互助が実現されることに意義があるのではないだろうか。ボランティアとは何かということに捕らわれ過ぎず、社会問題の改善という点に注目してほしい」という回答があった。

◇未踏高齢化と市民社会～日本の経験から（日本）

日本からの基調講演を行った東京通信大学の髙橋紘士教授（高齢者住宅財団顧問）は、日本の高齢化について、世界の誰も経験していないという観点から「未踏高齢化」ととらえ、高齢者が少なかった時代のケアの仕組みをどう克服するかが日本では最大のテーマであるとした。そこでの大きなポイントは、人間の社会参加を柱とするケアの仕方、すなわち高齢者を単なるケアの対象として見るのではなく、その人間が社会に参加しているという姿をベースとしてケアをデザインしていくべきだという。

高橋教授は、このようなケアを実現するモデルケースとして、空き家を活用して普通の民家で行う在宅ホスピスケアの取り組みを紹介した。そこでは、フォーマルなサービスとインフォーマルなサポートを地域にある住まいで支える見取りの場が、市民活動の手によってつくられている。また、単身の高齢者が非常に多いところに作った拠点で、看護師や臨床心理士などプロの人たちのボランティアと地域のボランティアとが協働して参加して単身の人たちを支えている例も紹介された。

日本では、地域の様々な人が一緒に生きるコミュニティをつくるという動きになりつつあるが、そこでは、プロとアマチュアの垣根をなくし連携とネットワークによって地域に豊かなソーシャルキャピタルをつくることが大切で、地域総ぐるみで社会参加を柱とするケアの仕組みをデザインしていくことが市民活動に求められていると、高橋教授は力説した。

高橋教授の基調講演に対しては、ホームホスピスの具体的な仕組みについて質問があり、「介護保険の在宅サービス制度も活用しつつ、空き家を活用することにより、退院後地域に戻る際の借家入居費用負担をなくし、短期のターミナルケアを民家という親密性の高い場で実現している」という説明が追加された。

（2）特別報告の概要

◇日中高齢者関係の交流現場＝相互触発・相互補完＝

日中福祉プランニングの王青氏は、特別報告として日中高齢者ケア関係者の交流とその中で得られた知見を紹介した。

王氏は、社会保障が完備され、医療と介護の融合が図られつつあるが、過度に制度依存で、家族や地域との人間関係が薄い日本、社会保障が未整備で、医療中心で介護が脆弱だが、「医食同源」を重視した自発的介護予防が盛んで、家族との人間関係が強く、地域の互譲精神が健在な中国という、日中の高齢社会の強み弱みの違いを、日中交流現場における具体例から説明しつつ、日中の間で「相互触発・相互補完」を進めることの重要性を説いた。

王氏の特別報告に対しては、「人権、尊厳、価値を市民社会が守りながら互いに発展し合う相互触発・相互補完が大切だとわかった」という感想が出された。

◇アジアの高齢化をどう捉えるか～「キャッチアップするアジア」から「学びあうアジア」へ

東京大学大学院人文社会系研究家の金成垣氏は、日韓の高齢化社会の比較を中心に、タイの事例などアジア諸国とも比較した特別報告を行った。

金氏は、社会保障が充実しているが財政の債務が大きい日本と低福祉だが財政の健全性が高い韓国の違いを示しつつ、ソーシャルビジネスの考え方を取り入れて、福祉館がハブになり、本業の一部をサービスとして提供する多様な商店と地域でサービスを必要とする高齢者をつなぐ韓国の新たな取り組みを紹介した。福祉国家とは別な方向として人々の支え合いを要とする高齢社会の福祉が求められているというアジアの共通項を強調しつつ、金氏はアジアにおける学び合いの可能性の大きさを示した。

金氏の特別報告に対しては、「制度による現金給付中心の日本の状況に比べて、韓国おそらく中国も民間による現物給付が重視されていることがわかった」という感想が述べられた。

（3）事例報告の概要

◇長寿社会における地域コミュニティの互助関係構築の試み-成都愛有戯コミュニティのボランティア活動-（中国）

成都市愛有戯社区発展センターの劉飛主任は、中国で千年の歴史がある伝統的なコミュニティのしくみを現代的にアレンジして、互助関係をつくり、強化していく「義倉」プロジェクトの実践を紹介した。このプロジェクトは、2018 年時点でのべ 1000 万人が参加するプロジェクトに成長しているという。

「義倉」の実践は、例えばコミュニティの各戸から米一合ずつを集め、粥をつくり、コミュニティにまた配るといった活動だ。食べ物だけではなく、様々な物品を持ち寄ってストックしアプリでどこに何があるかが分かるようにして、必要な人々に渡るようにするシステムだ。孤立していた高齢者を含め、こうした助け合いを通じてコミュニティをつくっていくプロジェクトだという。活動はこれだけではない。中国で盛んな「広場ダンス（娯楽と運動を兼ねた野外のダンス）」をする中高年の女性らに高齢者の家や施設、近隣などに行って踊ってもらうなどを通じて、世代間の交流も図っていると劉主任は語った。

◇高齢者教育における社会組織の役割（中国）

東北師範大学家庭教育研究院の趙剛院長からは、中国において家庭教育の一環として推進されている高齢者教育の事例報告が行われた。

中国では、急速に高齢化が進んでいる今、高齢者は充足感や幸福感が求める高齢者の学習意欲は高く、1983 年に最初の高齢者向けの大学が設立され、発展してきた高齢者向けの大学は入るための競争率も上昇しているという。

中国における高齢者教育の主な課題は、リソース不足、様々な人々のレベルに合わせたカリキュラムの設定などだ。政府の力だけでは行き届かない点が多いため、民間の役割が重要だと考えられている。新しい試みとしては、福建省でオンラインの高齢者向け講座を開設した。また、「50＋」という生活スタイルが民間組織によって提唱されていて、「50＋生活館」がつくられ、50 代以上の人々に充実した生活をサポートしている。中国では 50 前後で仕事を引退する人が多いため、50 歳以上 65 歳未満の人々の余暇活動やサービスに対するニーズは大きく、同時にこの世代は後期高齢者へサービスを提供する潜在力も高いという。

◇コミュニティケアと地域社会の世代共感（韓国）

三育大学校保健福祉大の鄭鍾和学長）は、住み慣れた地域社会で必要なケアサービスが住民に継続的かつ安定的な提供を、家庭訪問介護サービス、要支援者の発掘と連携支援、住宅支援、住民自治と住民参加という４つの軸で推進しようという韓国のコミュニティケア構想について報告した。この取り組みは、2018 年より 10 年間のモデル事業が行われていて、
日本で言うと包括ケア支援センターのようなコミュニティケアサービスセンターからのコーディネーター派遣が行われている。

韓国のコミュニティケア政策の中での市民活動のアプローチ、地域活動の事例としては、たとえば独居高齢者の課題について、食事についての関わりから、おかゆを学生が配達する仕組みができたり、キムチも配達しようという活動の発展が生まれたりしているという。

◇「グローバル・ソーシャルライフ・プラットフォーム」を通した「良い文化」の拡散（韓国）

社会的企業 HUG IN の申聖國代表は、世界中のチェンジメーカーを一つのコミュニティとしてつなぎ、彼らが互いに応援し合いながら「良い実践」「良いプロジェクト」を楽しく続ける文化を創り出すソーシャル・イノベーションカンパニー「HUG IN」の取り組みについて報告した。

HUG IN では、ソウル市内でチェンジメーカーの拠点を運営して人材育成を行いながら、スマホのアプリをつくり、「良い実践」をすればするほどポイントが増えるゲーム機能を搭載して、楽しみな

がら社会的問題を解決する実践を広げようとしている。高齢化社会との関わりでは、客が高齢者スタッフのミスも温かく受けとめ、高齢者が安心して働ける「注文を忘れるカフェ」が、韓国国内で10 カ月の間に３つの都市に拡大することに HUG IN のアプリが役立ったという。

◇人生 100 年時代の新しい仕組みづくりへの挑戦（日本）

公益財団法人さわやか福祉財団の清水肇子理事長は、超高齢社会における互助・共助を柱とした地域づくりを推進してきたさわやか福財団が、2014 年の介護保険法改正を受けた生活支援コーディネーター・協議体とその事業を住民主体で立ち上げる中間支援の取り組みについて報告を行った。

生活支援コーディネーターと協議体という仕組みは、さわやか福祉財団をはじめとした市民社会組織が、単に行政に資金がなくてできないから地域で行政が決めたサービスを安くやっていくというような地域福祉政策ではなく、どのような状況であってもその人が持っている能力を生かして地域社会につながれるような仕組みの重要性を訴える政策提言を行って実現した制度だという点について、清水理事長は強調した。

◇長寿社会と市民社会組織　－高齢単身者の住宅確保困難者に向けた NPO 法人抱樸事業紹介－プラザ抱樸プロジェクト（日本）

特定非営利活動法人抱樸の奥田知志理事長は、ホームレスの人たちの自立支援を行いつつ、子ども支援、障害福祉まで 27 もの事業展開を、制度に縛られない NPO 法人の特色を活かして行っている中での、高齢単身の住宅確保困難者を支える取り組みについて報告を行った。

経済的に不安定で、保証人が見つからず、日常的な生活の支援、見守ってくれる人もいないため部屋を借りられない高齢単身者にたいして、NPO 法人が家族の代わりとなり、家主と債務保証会社と本人の間に入って生活支援付き住宅を提供する事業モデルは、単に生活保護費を提供するだけでは自立生活が破綻しがちな生活困窮者を、総合的に生活支援する「地域・家族機能の社会化」理念の実践であると奥田理事長は力説した。

（4）パネルディスカッションの概要

◇高齢者ケアの主な担い手について

制度により介護の社会化が図られている日本の状況に対して、高齢者ケアの主な担い手について質疑応答が行われた。中国では、政府主導の政策に民間組織が参画して社会的なリソースを結集する取り組みが進められているが、介護に関しては依然として家庭が主な担い手だという。韓国では、お嫁さんが担うことが多いのが実態だが、若い世代が親と同居する意識や環境がなくなりつつあり、女性の社会参加率が高いこともあり、施設でのケアが急激に増えているという。

◇看取りのサポートはあるか

身寄りのない高齢者の総合的生活支援の中で、赤の他人が葬儀を出し合う家族機能の社会化を NPO が行っているという奥田氏の報告を受けて、中国、韓国における看取りのサポートについて質疑応答が行われた。中国では、多くのボランティアによる看取りケアが行われていて、葬儀や家の整理などのほかに、故人の個人史をまとめたりもしているという。韓国では、独居老人見守りセンターが全ての事後処理をしてくれるが、遺品の処理に資格が必要で専門の会社はあるものの、法的手続きなど困難な課題があるという。

◇IT はどう活用されているか

日本に比べて IT の活用が進んでいるという中国、韓国の状況について、さらに質疑応答が行われた。中国では IT の発展が猛烈な速度で進んでおり、公益分野にも広く活用されていて、離れて住む親の健康状態を子が IT を使って確認するシステムもあるが、多くの高齢者はこうした方法を好んでいない現実も一方であるという。韓国では、高齢者が倒れたときに地域にある支援センターが検知

できるシステムがあり、さらに認知症高齢者が付けスマートウォッチを KT やサムサンが出していて、心臓の状況や、血圧を測り通知して病院やセンター、家族が状況を確認することができるという。

（5）まとめ

今回のフォーラムでは、高齢化への対応という日中韓に共通する喫緊の課題をテーマとしたことにより、これまでと比べて議論がかみ合い深まる場面が多く見られた。そんな中で、モデル事業のブランド化によって広い国土への波及を図る中国、ソーシャル・ビジネスの手法を積極的に取り入れて制度の間を埋めようとする韓国、NPO などが市民参加型の取り組みを通して積み上げたノウハウを政策提言によって制度改善や新たな制度設計に活かそうとする日本という、社会課題との向き合い方についてそれぞれの特色が浮き彫りになった。

写真１　第 10 回フォーラムでの集合写真(10 月 28 日：JICA 地球ひろば・国際会議場)

写真２　フォーラム会場の様子(10 月 28 日：JICA 地球ひろば・国際会議場)

写真３　歓迎会の様子(10 月 27 日：JICA 地球ひろば・J's Cafe)

写真４　中国側視察(10 月 27 日：(特活)多摩草むらの会・夢畑)

写真５　韓国側視察(10 月 27 日：巣鴨地蔵通り商店街振興組合)

４．活動の成果

今回で 4 巡目を迎えた第 10 回フォーラム（東京大会）では、これまでにない 3 か国の連帯感と議論の深まりが感じられた。第 9 回フォーラムまでの課題であった、①国家レベルの大きな話と具体の事例との調整が難しく、各国からの報告でばらつきがあること、②同じ言葉でも 3 国間で言葉の定義が異なり、なかなか議論が前進しないこと、③公益・非営利組織の概念にギャップがみられ、話が噛み合わないこと、などが解消された会議だったと実感できる内容であった。これはテーマが 3 か国に共通するものであったこともあるが、他方では、それぞれがお互いの状況を踏まえた上で意見交換ができるようになった表れであると考えられ、これは 3 か国間の交流が 10 年間続いたことによる成果であると評価でき、従って、今後はより深い議論の展開と相互交流が期待される。

テーマ的には、「３．助成を受けた活動の報告」で報告したとおり、それぞれの国が置かれた社会環境、制度環境が異なる下で発展してきた 3 か国の市民社会組織の取り組みが紹介され、3 か国の参加者にとって多くの発見があったのではないかと推察され、その意味では有意義な国際交流が図られたものと思われる。また、フォーラムでの交流に止まらず、各国あたり 3 か所の現場視察を実施し、我が国における市民社会組織の取り組みを肌で感じたと思われる。

第 10 回フォーラムでは内容的に濃い議論ができたことを受け、今年度中に報告書を作成し、ホームページ等で広く一般に発信することを予定している。また、日本 NPO 学会第 22 回年次大会（駒澤大学）でもパネル形式で第 10 回フォーラムの内容について報告する予定である。

５．今後の課題

公益・非営利法人は、説明責任の一環として実施事業の内容やその成果について広く一般に発信することが求められる。今回は、第 10 回フォーラムの実施報告としてその記事を公益法人誌に掲載し、さらには報告書を作成しホームページから無料でダウンロードできるようにした。しかし、新聞社やメディア関係者の参加がなかったことから、より大きな効果が期待できるメディアによる発信に至らなかった点は十分反省すべき点と考える。今後は、メディア関係者に対して参加を促す働きかけが必要と思われる。

また、第 10 回フォーラムを開催するにあたり、準備過程で公益法人協会事務局に業務が集中してしまったことも今後の課題として挙げられよう。今回は混乱が生じることはなかったが、次回の東京大会に向けては実行委員会内で業務の割り振りが図れるよう検討していく必要がある。

以上